

三河アララギ

2023年 令和5年10月 神無月
かなづき

十月号

第七十卷 第十号



ニューヨーク日記(204) <http://blueshoe.copetin.com/>

BlueCat, Shoe Lady

KYOTO SUMMER

Blue Shoe Diaries



8月の日本は気候が厳しいですね。熱中症に気を付けながらも夏にしかない日本の楽しみ方が色々ありますね。お祭りや花火やさまざまなフェスティバル、我が家のお祝い事、母のお誕生日も暑い8月です。お祝いを口実に来る前からずっとフォローしていた京都の町屋さんにある素敵なレストランLURRA^oに行きました! 場所、お料理、味も見かけも、それからとってもチャーミングな働いている皆さん楽しそうで、全てが素敵でした。最近飽きていたファインダイニングにまた目覚めたかも。今度はどこに行こうかな?

Hopped over to Japan for the month of August when the summer weather is just brutal. Despite that, summer has its charms too. There are many festivals of sorts and great occasions (mom's birthday) for a fancy dinner out. I got to go to LURRA^o, a restaurant built in a machiya in Kyoto that I've followed since they began building. It was such a nice experience that it revived my interest in dining out! The space, the most charming staff who genuinely seem to love working there, and the beautiful and hyper-seasonal food. It was perfect.

目次

第七十卷第十号(通卷八三八号)

表紙・型染 今泉 由利(1)

ニューヨーク日記(204) Blue Shoe(2)

歌集 わが冬葵 御津 磯夫(4)

歌集「草々」 今泉 米子(5)

昭和63年一月号作品 大須賀寿恵(6)

昭和63年一月号作品 夏目 勝弘(7)

『歌集 八千代』 岡本八千代(8)

大空襲の日 弓谷 久子(10)

皇祖神の記録 今泉 由利(12)

遠花火 安藤 和代(14)

ありがとう 清澤 範子(16)

オジギ草 山口千恵子(18)

新潟平野 杉浦恵美子(20)

曲がり角 伊藤 忠男(22)

改装 白井 信昭(24)

体験 矢崎 直人(26)

『いこよせ』 『いーはとぶ』 森 厚子(28)

牧原 正枝(28)

水野 絹子(29)

水野 絹子(29)

牧原 規恵(29)

稲吉 友江(30)

鈴木美耶子(30)

吉見 幸子(31)

伊藤 晴江(31)

大武 智子(31)

細貝 杏衣(32)

江澤 穂(32)

梅澤 碧葉(32)

鈴木 優紀(32)

渡辺 悠貴(33)

篠塚帆乃佳(33)

小林 直史(33)

大谷 健介(33)

植村 公女(34)

木村 歩歩(34)

今泉 如雲(35)

今泉 如雲(35)

川口カルチャー受講者自作自詠俳句集(36)

五感を澄ませば(16)

附録(十六)

『優先席は必要か』

楽しい時間(131)

『酔いの徒然』(138)

『日本橋音頭』

絹の話(155)

『江上浩二の独り言』

初狩便り23

本田カイロプラクティック先生の春夏秋冬

康鍼治療院

『閑かに秋蟬を聴く』

編集室だより

『三河アララギ』について

矢崎 直人(35)

今泉 由利(35)

杉浦恵美子(38)

矢崎 直人(40)

中屋 保之(42)

山本紀久雄(44)

丸山酔宵子(46)

高橋 育郎(48)

今泉 雅勝(50)

江上 浩二(52)

花野みぶり(54)

本田 勇氣(56)

玄翁 (58)

殿山 木風(60)

今泉 由利(62)

(64)

(64)

歌集 わが冬葵

御津磯夫

異國の蝶みもりの眼球虹彩より癌發生の機序きぢよを得むとす

まつはれる蔓草は五種なかんづく蔓羊齒は強くほそ織くちぢれて

仙翁せんろうの鮭色の花さかしめてわれには名のみを知る人を戀ふ

交錯せる木草の中を抜きいでて大明竹の若竹の青

ぐらぐらになりて一年保ちつつ脱けし前齒のひとつ小さし

蕾にて白くこぼるるを惜しみつつ雨間の光をジャズミンに當つ

まつすぐに青若竹ののびたちてその秀のとがりいまだ撓まず

石の間より伸びたる竹はつきつぎに竹の皮おとすその石の上

庭のうちのみどりにかくれ細くしてをの戦きやすし風を知る草

こもりつつ母のいませる臺町の家をめぐりて雲の上の花

歌集 「草々」

今泉 米子

降る梅雨にたわみ亂るるエリカの木春の休みに子の植ゑゆきし

祖母のおもひでの一つ江戸表よりの舶來羅紗の黒き重かけぢゆう

洋傘といふをたづさへお駕籠にて嫁ぎ來ましきわが祖母は

アルゼンチンの米のうまきを言ひ來ればほのぼのとしてしばらく居りぬ

梱包を剥ぎし板にて机作り個展の圖案を描きいそしむか

柘榴割れくれなるの粒つぎつぎに落ちちりばふをたのしみとして

ホテルにて買ひたる爪皮下駄にのぼりゆく四百餘段の補陀洛の山

熊野杉に紅葉交らぬ那智の山時雨るる朝のひとときを居り

さざえの殻二つ包みし袋さげて雨降りやまぬ熊野驛前

引馬神社の棟上げ式の齊竹いはひたけとわが庭藪より伐りてゆきたり

昭和63年一月号作品

大須賀寿恵

霧除けよりゆらゆらゆらと下り来る蓑虫は蓑より頭出だして

汲み置きの馬穴の水を横ぎりて流れゆきたり冬雲一つ

南倉の豆味噌を冷蔵庫に納めおきてしばらく心豊かにをりぬ

桐の木の冬木に蓄の見えながら吹く木枯に鳴り立つるかな

キャベツ畑の甘藍キャベツに白々と霜ふれり鶴鴿尾を振るその霜の上

揃ひ来てわが屋根の上にてくちづけする翼黒きは何鳥ならむ

霜よけのビニールに光る露の玉今朝は静かに晴れ渡りたる

黄連雀の来るを待たずに切り倒す朱実たわわの垣のピラカンサ

坐り葉となりし苺の緑葉はいつしか赤く朝々の露

背の骨は網の目の如くなりゐるか癒ゆる当なきわが十二年

昭和61年一月号作品

夏目勝弘

一週間あまり番でゐし野バト今朝は一羽となりてゐにけり

広ごりくる雨雲ときどき見上げつつ松の古葉を揉上げてゆく

六十歩あまりで我が長山駅それより長し草の庭道

円形に刈り込みたる五月の上にカナヘビ只管冬日を浴びをり

目覚めたる我が耳元に六時です女の声は時計よりの声

あと一本アシビの手入れすればよい思ひし時に指を切りたり

短かき夢に目覚むるたびごとに時刻知りたき今夜なりけり

枕元に置きある時計に時を聞く電池の切れむ声のあやふし

朝には網を畳むオニグモの習性淋しと直に思ひぬ

ジヨロウグモ今年はまだ見ていない重大事のごとく思ひぬ

『歌集 八千代』

蒲郡 岡本八千代

白きリラ我の好むを知り給ひて君なき家より届けられたり

朝より松蟬なける磯山にわが西浦中学校体育館建ちぬ

羽織袴の行商人が職員室に赤彦牧水の拓本ひろげる

赤倉のきやらぶき漬を酒好きの父への土産に買ひて歸らむ

「坊ちゃん」の清きよが頼みし笹飴は一包五十円にて今いまも売りをり

日に三度山牛蒡出されし赤倉より四日のスキーを終へて歸りぬ

補習授業終へて小暗き教室に板書の文字をひとり消し居り

をりをりに持ちくる生徒の日記帳赤鉛筆にてわが批評かく

赤貝を獲りゐる船の見ゆる窓日の暮るるまで閉ざさずをりぬ

伐採のひびきは高し万座あたりやがて雪原になるといふところ

靄の字を忘れて吾子にモヤと書き万座の宿よりハガキを出しぬ

懐古園に行く道沿ひに咲きにはふ紫芙蓉の大きかりけり

西浦の北馬場の町のわが家まで今宵は遠き潮騒聞こゆ

捨てむかと思ひし古き重箱より祖母の木綿縞の財布出で来ぬ

青き空うつれる水たまり跳び越えて生徒らわれを追ひ越して行く

大空襲の日

豊川 弓谷 久子

沖縄に台風六号居座りて今日も荒れをり詮方も無し

記録的な暑さ続きぬ蝉時雨に包まれ我の一日始まる

蒔き遅れの向日葵漸く咲き初むる茎も短かく花も小さく

絶体に忘るる事無き八月七日豊川工蔽大空襲の日ぞ

安らかにと心に念ずる空爆に逝きにし二千五百の霊に

あの日より七十八年爆弾の下逃げのびし我ここにあり

瓦礫となりし工蔽内にて敗戦を知らされたりき八月十五日

只一輪高砂百合の花が咲く盆が来たよと告げいる如し

子の呉れし鬼灯今日の供華とせむ台風真近の盆となりたり

夕飯の献立を子と話し合ふ今夜はみさとが我が家に泊る

一人来て一夜泊りて帰りゆく幼なきみさとを思い出しをり

なつかしき引馬神社の夏祭り手筒花火がテレビにうつる

蝉の声いつしか虫の音と変り季移りをり気付かぬうちに

聞ゆるは蟀蟋の声涼しさと静けさ楽しむ夜明くる前を

暑きまま葉月は逝くか先々の見えざる世相と気候の中に

皇祖神すめろぎの記録

東京 今泉 由利

スイレン科蓮の呼名の定まれり熱帯温帯東アジアの原産と

朴の木の大型葉っぱを折り敷きて酒を呑みたるを皇祖神すめろぎの記録

自の心を通すすべからく勝手気ままな性格となる

水牛のフンをころがすフンコロガシ映像をみているついでゆきゆく

ティラノサウルスの体重は5tとぞ生きとし生きる命つらなる

カリブ海の大き自然の映像よ今朝見る地球のひとつところを

海の中魚の最深記録として8336mスネイクフィッシと名付きをり

強くなるより方法は無かったと三河徳川家康のこと

自の範囲のことではあるけれど始まったから終りとなるまで

旧東海道松の並木の残りゐる古里ありて心寄りゐる

倒れてもまた起きあがるパイアの木の生命よ果実パイア

木登りを子パンダに教えゐる母パンダゐて地球成る

薄暗がり東京天空見上げつつ櫟枯葉の散り来る散り来る

六十年過ぎにしことを語りあふ東京ど真中ひとつの夜を

ふるさとのことも少しは語り合ふ共通点のあるがうれしい

遠花火

豊川 安藤 和代

山脈も入道雲に抱れいて暑き今日とぞ啼く鳥も見ず

荒川の花火の動画男孫から華やかな美よ暑さ忘るる

来春は曾孫生まるとラインあり喜び元気の全身巡る

初孫も見づに逝にし嫁思う曾祖母となるも心悲しく

人生は喜び悲しみ波いく重強く生きたし拳をたたく

盆の夜を御先祖様を偲びつつ清めし門に迎え火を焚く

言いたきは胸にあふれて迎え火も心知りてか大きく揺らぐ

好物を供えて祭る盆三日遺影は皆んなほほ笑みており

コロナ今だ鎮まらぬのに猛暑酷暑台風襲来心乱るる

百日紅真盛りなるを遠く見て月の詠草ポストにおとす

一点の白球を追う若者の熱き姿に拍手をします

書類などすべて電子化今の世を悩めば青き柿の実の落つ

有罪無罪闘っており五十七年九十才の姉のたくまし

私にもあつたあの日と夏の恋佇む庭に遠火花火見ゆ

夕づけど暑さ残るる裏庭に虫の音ひとつ小さき秋知る

ありがとう

春日井 清澤 範子

八月に大腸検査がある予定娘に負たんかけぬよう頑張り生きる

吾のためにアピタからアイスクリームまたチョコレートなど買い来てくれぬ

まず今日ののどのお通しは類さん好む酢サバの弁当なり

朝から気温三十度こんな日は熱中症にならぬようクーラー入れて静かに休む

娘と二人の家族にてTの字廊下拭くもせつなくて

小鳥の声ききつつ朝のお味噌汁娘と吾との共同作業

汗だくになりつつ娘はクーラーバックを持ち買物に出ず

徳洲会病院にて始めてリハビリ足の前後の運動を教わりながら練習をする

また朝が来た娘は手ぎわよく朝食の仕度手ぎわ良く

まず起きてのどを通すは抗ガン剤のみ始めてより半年になる

吾の足具合悪ければつぎつぎと娘の負担増えるばかり「娘よありがとう」

オジギ草

豊川 山口千恵子

散歩道曲りてゆけば畑一面向日葵の花朝日に向ふ

青き網はりめぐらせて培ひゐる鉢に植ゑたるブルーベリー

夜の更けて一人の部屋の静かなり冷蔵庫に氷の出来て落つる音

糸調子やうやく整へミシンに縫ふ残り布にて手提二つ

しのび込みし蠅打たむとし蠅たたき持ちくる間を待ちてはくれぬ

食卓にどこからともなくやってくる蠅一匹を打たむとかまへる

賜りし歌集を出だしひもとけば在りし日の姿なつかしき事々

水やりて草取りをして成りてゐる育ちすぎなる茄子をもぐなり

縁側に出でて西瓜を食べしことはらから幼し夏の思ひ出

張り紙にお持ち下さいとオジギ草一鉢貰ひて自転車のカゴに

自転車の前カゴに葉を止すオジギ草鉢に植ゑたりもう驚かせないよ

大楠に蝉も鳴かざる昼下がりに葉書一枚持ちてポストへ

漬け上げし赤き梅干し揚げ干すほのかな香りただよう中に

休耕の田に芽生えつつゐる大豆強き夏の陽に青く列なす

炎天に青き列なす大豆の上乾ける熱き風の吹き過ぐ

新潟平野

蒲郡 杉浦恵美子

特急しなのはくたかしらゆき乗り継げば信濃川沿ひ新潟平野

ああこれが米山さんかしらゆきの車窓に突如ゆかしき山容

はからずも米山さんから雲が出た三階節が口を衝きけり

三階節こんなのいつから知ってたのお座敷歌でしょ誰から覚えた

柏崎駅を降りても何もないそういや此処は原発の街

柏崎我が目的はただ一つキーン記念館歩いて行きましょ

キーンさんのハドソン河畔のアパートのリビングそっくり移してありけり

ハドソン河臨むリビングこの景觀手放してまで日本に帰化とは

復元の書棚の真ん中この本はわたしも持つてるキーン記念館

キーンさんのリビング擦り切れ絨毯は父君の遺品の中国製

今は早キーンさん亡くこの部屋はニューヨーク遥か越後の鄙里

キーン記念館今日訪ふ人は我ひとり係員の眼ずっと気になる

みすゞ飴我が好物と憶えゐて上田土産を友の夫君が

みすゞ飴どの味が好き六種類やはり信州は黄金のあんず

あれは何時早朝の花畑見るためにあんずの里を夫と訪ひしは

曲がり角

大阪 伊藤忠男

朝は秋昼は猛暑のこの季節今年は特に激しなりけり

絡み合う夏の日差しに秋の空ひまわり園にコスモスが咲く

庭の主蟬の声から虫の声取って代わりて秋風が吹く

葉月過ぎ微かに揺れる涼風に蝉鳴く声も弱々しきや

朝日受け虹立ち昇る霞空夢を架けるかり山の夏

小魚をくちばし挟み打ちつける見事なるかなカワセミの技

窓を背に手足伸ばして湯に浸かる耳に届くはひぐらしの声

杖の柄に止まり傾げる赤とんぼ目と目が合いて身動き取れぬ

銀色に輝く湖水清ければ魚棲まずとも月宿るなり

真夏日もこれで何日続くのか庭では虫の鳴く声とする

焼肉の香りで夏も終わりなり葉月は僅か一日なりぬ

芽がでて花が咲くには先の先肥やし水やり手入れ欠かせぬ

麗しきカワセミ誰も思うまい小魚獲りのハンターなるを

軒先で羽根を休める赤とんぼ気付かれぬよう窓そつと開け

夢架ける虹の足元いかなるや近づくなれば消えてなくなる

改装

豊川 白井 信昭

角口小さき罎の中にして黄菊ひと花さきつぐ葉月^{はづき}

生垣にジャスミンひとつ三月へて白きひと花葉月の開花

日は昇り日差し来たりぬ部屋の内蟬時雨^{せみしぐれ}聞こゆるひととき

東の胡瓜^{ひんがし}の蔓は一本に実の幾つ成り妻と孫と取る

朝寝の我妻との食事もそこに手分けの掃除とりかかりたり

門口の勾配の為木を交いて二か所ロープ張り据えられて

南^{みなみ}の広き海域台風の六・七号なほ進路つかめず

朝八時半職人四人揃よつたりいたりビニールシート床に貼りゆく

蜂の駆除一階ひさし廂にて担当者防護服着て巢二つ取りぬ

盛夏の候猛暑一週間職人達熱中症ならず改装終えけり

身障者向き明るい個室今日よりは洋風トイレ家族

点滴の妻の乳癌抗癌剤外来治療送り迎えする

幾年もかかりつけ医と地元歯科功先生の訃報に接したり

先生のご逝去されし八月六日今日という日の冥福をいのる

生垣のサルスベリ根元再びをピンクに咲けり晩夏の開花

体験

埼玉 矢崎 直人

熱が出て喉の痛みで検査して新型コロナ陽性反応

全身がただひたすらに休息を心身ともに取るかに怠い

コロナになり部屋に食事を運ばれて利用者の身の少し分かりみ

発症後上がりし熱の三十八度超え二日、三日と続いてゆけり

このコロナ本格的に休まなきやとても危機感覚え始める

ご飯食べ薬を飲んで寝て汗を汗を一杯一杯にかく

休む時休める勇氣その後を続けるために休める勇氣

様々な背景の人それぞれの立場で社会福祉士目指す

気づくこと自分の意見求められ考え答えを出してゆくこと

考察が導き出せる困難な体験自分のものになるか

その時の答えを考え考えて答えを出して出し続けてく

とりあえずやってみるだけやっていきまた振り返る学びゆくこと

振り返り焦点をあて書けること考察導き出して書けるか

志同じく福祉で働ける同期と迎えてもらえて嬉し

岩槻の駅の二階の夕焼を受けて聳ゆる富士にまみえん

『いじよせ』

西浦公民館 いーはとぶ

かの時の屋根を覆ひしブルーシート五枚がたたまれ備へしままに
牧原正枝

車庫の奥ブリキケースに備へるはタオルや石けん玉ネギもつるす

草のたね草の球根手に負へぬブルーシートにてひと畑覆ふ

暑き中ノベルティー配り終へたれば涼風のきてフォークソング聴こゆ
森厚子

よさこいの踊り子の粧ひ目を見張る吾らもすでにまつりの一員

堤防に家族三人座り見る大輪枝垂る正三尺玉

洪々と横に並んだ末孫と背くらべする姿見の中

水野 絹子

中学の男の孫に背を抜かれ我はにんまり大きくなあれ

汗だくで作る食事は七人分これも善き哉我が日々なれば

わが畑の隣のセイタカアワダチ草暑さに負けず生き生きとして

牧原 規恵

炎天下木陰求めて休みたり未だほのぼの鶯の鳴く

梅雨明けで一斉に聞こゆ蝉の声あちらこちらに抜け殻のあり

寝苦しき夜半に目覚めて深夜便つけければ流る「ブルーハワイ」が

稲吉友江

まう一年休みてしまへり太極拳逸る気持と皆の笑顔と

「又来るね」母を見舞へば泣きだせり置きて帰り来我も泣きたし

四年ぶりに名古屋駅歩むジグザグと「ごめんなさい」など時々言ひつつ 鈴木美耶子

かつて友と幾度も来たりこのカフェにひとりクロックムツシュイいただきをりぬ

変はらずに鉢のハーブの置かれるる来たれませ友よまたこのカフェに

かめの中メダカの針子幾数匹小さき命よ朝影の中

吉見幸子

水の月菓子「水無月」を探したり外郎生地に神在の小豆

夏至来たる小雨そぼ降る庭を見る蝶々舞ふごと半夏生の白

屋久島を知りし頃より憧るるプロペラ機より夫と降り立つ

伊藤晴江

見上げたるこの縄文杉この地にあり七千年の時を思ひつつ

原生林続くその先に朝日見ゆモツチヨム岳を紅く照らして

こともなくわが生日は逝かんとす九・一一の数日後にて

大武智子

鉢植ゑのピーマントマトに花咲けば揚羽蝶来てしばらく遊ぶ

犬を連れた奥さんと言ふチェーホフの短編ありき百年の昔

現代学生百人一首

東洋大学

点Pさんぐるぐるまわる図形上楽しむあなたと苦しむ私

埼玉県立川越女子高等学校二年 細貝 杏衣

看護師の祖母が引退「おつかれ」とハグしたいのをはばむ世の中

埼玉県立川越総合高等学校三年 江澤 穂

コロナ禍で日々マスクつけ気がついたプリクラよりも盛れる気がする

埼玉県立松山女子高等学校二年 梅澤 碧葉

三〇〇年時空をこえてバロックを奏でる僕にバッハがコケる

市川中学校二年(千葉県) 鈴木 優紀

人が増え広い教室狭くなる終わりを告げた分散登校

市川中学校二年(千葉県) 渡辺 悠貴

コロナ禍で出かけられずに家籠る一度も着ない夏服たちと

敬愛大学八日市場高等学校三年(千葉県) 篠塚 帆乃佳

オンライン画面とマイクで授業中下から大声ごはんですよ

芝浦工業大学柏中学校二年(千葉県) 小林 直史

本屋行き好きな作者の新刊を買い読む時の至福の時間

芝浦工業大学柏中学校三年(千葉県) 大谷 健介

『俳句』

出迎や親子二代の夏帽子

植村公女

鉛筆をコトリと落とす夏季講座

葉づたいにころがり消ゆる芋の露

休日の公園に人なし酷暑

木村歩歩

逃げ込めど身の置き場なし閻魔堂

山積みの未決の書類残暑かな

打ち解けてリハビリの後ソーダ水

雲映す硝子細工の秋暑し

試験前てふ夢覚めて残暑の夜

今泉如雲

新田次郎藤原てい藤原正彦のこと流れ星

八月の兵営跡の郷土館

盆休みコロナで寝込んでしまひけり

矢崎直人

病床の膳にはつましゼリーかな

夏の風邪予定に狂いが生じけり

台風のさなか休みの大切さ

志ともにし秋の夕立ちなか

水平線今日の朝日の八月尽

今泉由利

石柱の考える人秋思

釣舟草まるはな蜂と相互あり

窓の秋大きくなつた火星あり

松茸の育つ速度の速送り

水を吸うナトリウムを吸うアゲハチョウ

水牛のフンをころがすフンコロガシ

いつまでも生きゆくつもり四万六千日

炎天下の南無阿弥陀仏空也上人

奉納は短冊結ぶ萩の枝

川口カルチャー受講者自作自詠俳句集

炎天下打席待つ身の武者震い

秋山

病床明日は退院猛暑かな

金木犀今朝一番の深呼吸

点滴の一滴がっつらい秋の暮

耳鳴りと違う音色の鉦叩

チャンチャンチャンチャラチャン津軽三味線夏の駅

木風

戦争はやっちゃイケナイと終戦日

旧盆は仏壇の前団扇あり

炎天下声が消す甲子園

夕暮れや歩く背を押す蝉の声
夏祭り太鼓の音に胸躍る

菱泉

黄金色風に稲穂は頭下げ

紀山

幹事会雷鳴の中我り急ぐ
街路樹の草木喜こぶ恵みあめ
猛暑日で鳴く声弱しせみの声

恵風

おごそかに奉納演奏観月会

由利

思いやり心遣いの観月会

天高し一步一步の地球道

東海道松並木に秋の風

漢詩吟命なりけり空高し

五感を澄ませば (16)

杉浦恵美子

処暑

夕方、リビングのカーテンを閉めようとしてふと「日が暮れるのが早くなったな、立秋はとっくに過ぎたけれど今頃は一体二十四節気で何と云うのだろう」と調べてみると「処暑、夏が過ぎるころ」。

たしかに昼間は猛烈な暑さが続いているものの季節は確実に廻っていることが判ります。

ぼんやりとこの夏を振り返っていると、携帯の着信音。恩師の訃報でした。

ああやっぱり。さつきから胸騒ぎがしていたのはこれだったのか。

90歳過ぎても独りで頑張つて来られたのが到頭無理になり娘さん達のお世話が必要となつて三年余、97歳という年齢に不足はないものの、何十年の間眼前に聳えていた高峰が突然消えてしまったような喪失感は埋めようがありません。

恩師岡本八千代先生は、我が人生の不思議なご縁で関わって下さいました。

幼い頃は父母の親しいご近所として、中学生時代は恩師として、在職時代は理想像として、そして最重要なのは「三河アララギ」の先達として。それは師への憧れの延長線上でした。今思えば必然的な。

導かれて初めて御津磯夫先生にお目にかかった日のことはよく思い出します。

威厳のある大先生で怖くてまともに顔を上げることもできないほどでしたが、師の紹介ということですんなり入門が叶いました。

以来30年、「三河アララギ」と出会えたことは紛れもない私の心柱となっています。

意地っ張りな私は、「わたしはわたし」を貫いていると自負しているつもりでしたが、こうして振り返ってみると、何のことはない常に師の背中を追いかけていただけではないかと改めて思い知らされています。

師は、決して平坦な道を歩いて来られたわけではありません。

当時の田舎の女の子がどんなに才気煥発でも諦めるしかなかった学問への志を貫かれたのみならず、大変な努力の蓄積を惜しみなく発信され、教養の深さを体現されて来られました。

伺えば、貴重なご体験をむしろ楽しそうに語ってくださいるのを長編小説のように興味深くお聞きしたものです。

こころゆくまで文学や芸術一般の話題が尽きず、中でも「三河アララギ」へのご精進ぶりには、知らず知らず襟を正す心持ちになり、毎度幾つかの課題を頂いた気分で辞去したものです。

外出がままならなくなり、お目にかかるのが難しくなっても、師の存在を意識しただけで安心感がありました。それが・・・

私の今の心境を表すのに比較的近いある詩を思い出しました。

19世紀アメリカの詩人、エミリー・ディキンソンの作品です。

悲しみのようにひそやかに

夏は過ぎ去った―

ついに、あまりにもひそやかに

裏切りともおもえないほどに―

もう疾うに始まった黄昏のように

蒸留された静けさ、

またはみずから引きこもって

午後を過ごしている「自然」―

夕暮れの訪れは早くなり―

朝の輝きはいつもと違う―

ねんごろで、しかも胸の痛むような優美さ、

立ち去ろうとする客人のように―

このようにして翼もなく

船に乗ることもなく

私たちの夏は軽やかに脱れ去った、

美しきものの中に。

(安藤一郎 訳)

ぼんやりと庭眺め居り処暑の夕つひに至りぬ恩師の訃報

附録（十六）

矢崎直人

病床の膳にはつましゼリーかな

新型コロナに感染し、一週間ほど自宅で寝込んでいました。幸いにも同居している両親には感染しませんでした。三十八度台の熱が三日ほど続きました。さすがに食欲がなくなりました。部屋に食事を持って来てもらい食べていましたが、喉が痛くて熱が出た時にゼリーなら食べられるかと子どももの頃に出してもらったのを思い出しました。

仕事や、学校や、その他もろもろ全ての予定をキャンセルしてひたすら治すことだけに集中しました。コロナにかかって休んだ一週間で、休む時は休まなければいけないとつくづく思いました。実家に帰って看病をしてもらい、安心してゆっくり休むことが出来て有難いと思いました。

休む時休める勇氣その後を続けるために休める勇氣

志ともにし秋の夕立ちなか

通信課程で社会福祉士の資格取得を目指して勉強しています。スクーリングがあつて学校に行き講義を受ける時

間とグループワーク、実習があります。コロナの陽性になって欠席した分、スケジュールを変更して受講することが出来て助かりました。

グループワークのクラスで、最初出席する予定だったクラスを変更してしまったので途中からの参加になって周回は顔馴染みになった人達のグループでのクラスでしたが、受け入れてもらい無事に修了することができました。

性別、年齢、職場や経歴が様々な方々の中で、共にソーシャルワーカーを目指す人々と学ぶことが出来て刺激を受けました。生きていく中で困難に直面した時に、色々な制度があって利用できるのを実際に利用した経験がある方ともお話が出来て、知識と経験を結びつけていくことの大切さを学びました。

様々な背景の人それぞれの立場で社会福祉士を目指す

『言いて妙』これぞニックネーム』

中屋保之

「ニックネームで呼び合うことを、禁止」している小学校が増えている「らしい。エッ、なんで?」である。

どうやら二〇一三年に施行された「いじめ防止対策推進法」などにより、これまで以上にいじめ防止対策の義務が学校側に課されるようになり、呼び捨てや名前以外の呼び方ではなく「さん」（あるいは「くん」）などが好まないとされ、それを受けて「あだ名禁止の校則」を掲げる小学校が増えているようなのである。奇異に感ずる私は、時代錯誤なのか。私には、当局に対する、^レ「忬度」に思える。もちろん、身体的な揶揄やいじめに繋がる呼び方は厳に慎まねばならないが、それをチェックしケアするのが大人、就中、教育に携わる者の責務であることには言を俟たない。

「洒落た」あだ名や「言い得て妙」なニックネームは、人と人との距離を近くしたり関係を円滑にする効果も見逃せないメリットであろう。これと言ったニックネームを持たなかった私としては、ニックネームで呼ばれる友人知人が今でも羨ましい。発案者としての自画自賛を含めていくつか紹介する。小学校の同級生のミシマくんニチョコペー（小柄でちょこまかしていたから）。中学校同級生のキョセくんニキーたん。何とも微笑ましいではないか！高校時代、我が弓道部主将であった洪司くんニ変な虫（彼のさほど面白くないギャグを仲間が、^レ無視、それでもめげずダジャレを止めない彼に敬意を籠めて付けたあだ名）。小高先生ニ猛獣（高校の社会科の先生でサッカー部部长。怖かったア）。大学の仲間のハナワくんニかおるちゃん（当時、^レかおるちゃん、遅くなつてごめんね」で始まる歌

の題が「花はおそかつた」 どうみても、いじめにはなり得ない。

政治家には、ニックネームが多い。岸田現総理は就任早々、「令和の遣唐使」と名付けられた。答弁に「検討します」が多かったことから、見事である。田中角栄に付いたあだ名は幾つかある。私のお気に入りは「コンピュータ付きブルドーザー」である。「目白の闇將軍」は、総理退任後も自宅（東京・目白）にあつても隠然たる影響力を保持した所以だとか。まさに言いえて妙。その風貌から「ライオン宰相」と呼ばれた浜口雄幸、「だるま宰相」の高橋是清は、私たちより年配の方々にはなじみ深い呼び名であろう。「マツチポンプ」などという有難くない名で呼ばれた代議士がいる一方で、「井戸堀代議士」と称賛される議員もいる。いくらかの揶揄もあるのだろうが、大方は、賞賛を籠めたニックネームと言えよう。また、三木武夫の派閥を引き継いだ河本敏夫には「笑わん殿下」のあだ名が献上された。寡黙で謹厳、めつたに笑顔を見せることがなかったことからタイの王族ワンワイタヤーコーン・ワラワンに因んだそうである。個人的には、もう少し中央で活躍して欲しかった政治家のひとりであった。

私が勤めていた会社には、田淵と田淵の二人のタブチ社長がいた。社員は「大タブチ」「小タブチ」と区別していた。また、明治大学野球部監督であつた島岡吉郎は「御大」、ラグビー部の元北島忠治監督が「親分（国定忠治が出所）」と呼ばれて親しまれた。昨年、コンサート活動から退いた加山雄三は、永遠の「若大将」である。長嶋茂雄の「ミスター」とともにこれ以上ないニックネームであろう。ニックネーム、捨てたもんじゃアない。

楽しい時間 131 山本紀久雄

2023年8月31日

「明治天皇が鉄舟から得た判断基準」その十六

明治15年(1882)3月から明治16年(1883)8月まで、伊藤博文は各国憲法調査のためヨーロッパに滞在した。伊藤にも影響を及ぼしたのはウィーン大学教授のシュタインであった。シュタインは以下の三点を重要項目として伊藤に述べたという。(以下参照『明治天皇』伊藤之雄著 ミネルヴァ書房2006刊)

- ① 行政権が優位であるべきであるが、行政権・君主権・議会の権限の三者が緊張関係にあることが望ましい(三権はいずれも重要で、逆に君主権といえども制限されるべき)
- ② 憲法はその国固有の歴史を反映したものであるべき
- ③ 歴史は変化するので、憲法の運用や制度も変化していくことが自然である

これを受け、伊藤はドイツ憲法をモデルとし、日本の実情に合うようにアレンジしようとの考えを固めた。この考えは、憲法の下に君主権を制限していくという、ヨーロッパの最先端の考え方を日本に導入するものであった。これは君主機関説といわれ、19世紀のヨーロッパで通説になっていた考え方であった。

この考えを別の表現におきかえるならば、天皇を現人神から「人として十分なる尊敬される」立場に変更し、一方、憲法によつて天皇に「一定の限界以上は決して侵させない」ようにすることであったが、そのために不可欠な条件は、明治天皇がこの考え方を受け入れるということであった。

伊藤はシュタインの憲法を明治天皇に直接学んでもらおうと、シュタインを日本に招こうとしたが、高齢を理由に断られ、ここで伊藤は次なる手を打ったのである。

明治天皇の信任厚い侍従・藤波言忠をドイツに派遣したのである。

この藤波に憲法を学ばして、天皇に講義させるよう伊藤が考へ、馬が専門の藤波は、ドイツ語も英語も不得手であったが、通訳掛として新山莊輔をつけ横浜から出発した。

シュタインは、ウィーンで藤波と新山を前に、自分が明治天皇の前で講義するつもりで、約9カ月間にわたつて英語で熱心に講義を、朝9時から夕方4時まで毎日行われた。

藤波は過度の勉強の結果、精神疾患になるほどで、それが徳大寺侍従長から明治天皇にも伝わり、天皇から見舞もあった。

明治天皇は、自分と同様に語学の得意でない藤波が、若いとはいえない年齢ながら、遠い異国で専門でない憲法を必死で学び、精神疾患にまでなったという事実にも、感銘を受けたという。明治天皇は、伊藤博文のような能力のある人間を評価する一方、こういう愚直な人間が好きであった。藤波と新山はシュタインの講義を聴き終え、明治20年(1887)11月、2年3カ月ぶりに帰国した。

藤波は帰国後、「その年12月から翌年3月にかけて33回にわたつて当番宿直の夜に」シュタインから学んだ憲法学を明治天皇と美子皇后に進講した。

この間、藤波の講義に、両陛下は熱心に耳を傾け、納得できないところは藤波に質問し、藤波が即答できないときは、新山に調べてもらい、改めて奉答するという、極めて真摯な両陛下の

受講姿勢であった。

明治21年（1888）4月、伊藤は憲法草案を明治天皇に奉呈し、枢密院は5月から審議に入り、7月に議了したが、明治天皇は、これら審議のすべてに出席し、修正事項は朱書にして提出させ、理解できないところは伊藤枢密院議長を召して説明を受けた。季節は夏に向かい、窓を通して暑い日差しが入っても、明治天皇は暑さを訴えることなく、常に真剣であった。

憲法と皇室規範審議の後は、議院法・会計法等の憲法付属法案の審議を行い、明治22年（1889）2月に終了したが、これにも明治天皇は毎回臨御した。

これらの審議において、明治天皇は直接には意見を挟まないものの、原案や修正点をよく理解したうえで承認したので「大日本帝国憲法は、自らがつくった欽定憲法である」という認識を強く持ち、そのことを誇りにしていたという。

つまり、大日本帝国憲法は万世二系の天皇が統治する（第一条）とある一方で、天皇の統治は憲法の条理により行う（第四条）という限定がついていたことを、よく分かっていたということであるが、これは重大な意味合いをもっている。

それは、天皇としての行為範囲を承知した、つまり、天皇としての行動権限と、行動限界範囲を悟り納得していたということである。

言葉を換えていえば「自らの行動判断基準」を身につけられたということになる。

その状態は、いわば一種の悟りの境地、それは「大悟」とも言えるかも知れないが、憲法という「判断基準」をマスターしたので、その時の感情・気分が変動していたとしても、憲法に基づ

いて判断するわけであるから、正に「平常心で処理できる」という意味に通じることになる。

それまでの明治天皇は、帝王として必要な学問を二心学んでいたが、それよりは馬術にのめり込み、酒を好み、どちらかといえば勉強は得意ではなかった。

だが、この憲法制定過程では、徹底的に検討し、問題点の把握と、自らの立場の検討を行ってきたことを通じ、その後が発生した問題・事件に対してどう立ち向かうか、という判断基準を体にし込ませたのである。

その体得された基準から意志決定を行うので、妥当な判断が可能となつて、伊藤之雄著『明治天皇』（ミネルヴァ書房2006年刊）が述べる「明治天皇の絶妙なる政治関与」という状況になったのではないかと考へる。

人はある二定の境地、囲碁将棋棋士や画家や一流スポーツ選手でいえば名人の域に達すると、そこから世の中がよく見えるようになるという。これは鉄舟の大悟という心境に近いレベルと考へられ、明治天皇も同じではなかったかと推察する。

脳の中に妥当な判断基準を持つことが出来れば、その人は素晴らしい才能を発揮するという事例が明治天皇で、それが政治への絶妙な関与となつて顕れたのだと考へている。

つまり、明治天皇が明治23年に国会開設を行うと自ら決めた事、それは目標から現在を考へるといふ思考過程を採ったことであるが、これが為政者としての明治天皇の素晴らしさであると思う。

『酔いの徒然』（二三八） 丸山 酔宵子

『夏の終わりのクルージング』

「このあたりの海域が北朝鮮のミサイルが落ちたところか・・・？」

夏も終わりに近い炎天下の日本海。クルージング客船ダイヤモンド・プリンセスが、遙か地平線まで静かな海が続く大海原を気持ちよく航海している。夏の終わりの太陽がプールサイドのデッキに横たわる肌にキラキラと照りつけてくる。

8月23日に横浜を出港し、函館、小樽と停泊し、今、将に一路釜山に向かっている。4年前の年末、コロナ禍で船内に隔離され長期滞在を余儀なくされ話題になったダイヤモンド・プリンセスが、コロナ終息で、4年ぶりのクルージングの再開である。10年前に一度乗船しその優雅で快適なクルージング・ライフをもう一度と、この度の乗船である。

炎天下一路釜山へ波静か

酔宵子

総トン数：1115、875トン、全長：290メートル、乗客：2,700人、乗組員数：1,100人、巡航22ノット（41キロ） レストラン、バー、プール、劇場、カジノ、免税店、ジム、スパ等々がそれぞれ数ヶ所用意され、将に帝国ホテル或いはホテルオークラが、いや、それ以上の施設がそっくり浮かんで航行しているのである。

乗客は勿論日本人が多いが、欧米系、中国系、アラブ系などの外国人も多く、国際色豊かである。クルーズ・ライフでは、フォーマル・ディナーが組み込まれ、キャプテン（船長）主催のシャンパン・パーティーも開催される。ロングドレスにタキシード、和服に紋付き袴、チヨゴリやチャイナ・ドレスなどなかなかカラフルでゴージャスである。日常を忘れ、エンターテインメントも至れりつくせりで、ラジオ体操やヨガから社交ダンス、ゲームやカラオケなど、朝から晩まで、これでもか！と用意されている。

500人も入れる豪華なシアターでは、毎夜豪華なショーが繰り広げられ、今夜はウクライナ出身のクラシックバレーのペアーの感動のショーである。ウクライナの現状への思いもあるが、最後は二人でウクライナの大きな国旗を掲げて登場した際には全員総立ちのスタンディング・オベーション。

シヨ一の後は、メインバーでの締め一杯である。グラスをもつてデッキに出れば、月明かりに照らされた日本の大海原が静かに広がり、悠然と進む船からの潮風が心地よい。

月照らす湖のごとく日本海

酔宵子

翌朝、腹の底まで響く汽笛の音で目を覚ますと、眼前には朝日に輝く近代的なビル群が聳え立つ。人口320万人、韓国第2の都市「釜山港に帰れ！」の釜山である。

市内観光に出れば、2030年の万国博覧会誘致で活気にあふれている。韓国老舗本格焼肉でカルビ炭焼きをたらふく喰って、ごった返す安売り国際市場で、熱暑で不足しそうなTシャツとパンツをゲット。

釜山から対馬列島まで50キロ、晴天の日は島がはつきりと見えるそう。明日は最後の寄港地長崎である。

炭盛ん汗を拭き拭きカルビ焼く

酔宵子

クルーズも大詰め、灼熱の長崎を後にして一路横浜へ。

晩夏の陽が落ちる頃、長崎港岸壁では送迎のセレモニーの大歓送和太鼓パーフォーマンスである。大音響の汽笛の音の中、船がゆっくりと岸壁を離れ、デッキには乗客が熱烈！和太鼓を見ながら手を振っている。和太鼓と銅鑼（どら）の音が汽笛の音に紛れて、だんだん小さくなってくる。

長崎から横浜までは、鹿児島沖を経て太平洋をひた走って1600キロ。約2日の航海である。

今夕は満月、スーパー・ムーンである。夕食前にサウナ付露天風呂で、満月の光を浴びながらゆっくり旅の疲れを癒しますか・・・。

満月を浴びて洋上露天風呂

酔宵子

日本橋音頭

高橋育郎

一 ハア 花の東京 日本橋

日本のまんなか めでたいな (ソレ)

五つの街道 伸びて行く

みんな揃って 輪になって

サアさ 踊れ踊れや シヤシヤンとな

シヤシヤンとな 踊れや

二 ハア お江戸日本橋 魚河岸の

繁昌ますます 栄えてる (ソレ)

並ぶ店々 人通り

文化の花が 香り咲く

歌え 踊れ踊れや シヤシヤンとな

シャシャンとな 踊れや

三 ハア 江戸の名残の 人形町

三味も懐かし 道筋は(ソレ)

甘酒横町 浜町へ

芝居で賑わう 明治座よ

浴衣姿の 粋な人 シャシャンとな

シャシャンとな 踊れや

四 ハア 未来に開ける 日本橋

アーチの石橋 空うらら(ソレ)

水の流れに 光る屋根

鳩が飛び立つ 西東

サアさ 踊れ踊れや シャシャンとな

シャシャンとな 笑顔満開

絹の話 (155)

「アトリエテレビ」今 泉 雅 勝

平安時代中期の貴族と絹

貴族は早起き

清少納言の枕草子「春はあけぼの」の冒頭は誰もが知っている名文ですが、それには平仮名という新たらしい表現方法の支えがあったことは言うまでもありません。3時に起床して身支度を整え、満天の星に祈りを捧げ、本日の占をして、日記などをしたためていると、宮中の太鼓の音が聞こえてきます。それから四半時少々の5時頃、二の太鼓が鳴る刻には出仕しなければなりません。清涼殿に出入り出来る三位以上の殿上人は出仕自由でしたが、四位以下の中級、下級貴族は繁多な仕事が多く、夜勤の人との交代もありますので朝廷への出仕は朝早い必要があります。

清少納言は従五位上でしたので早起きしていました。藤原家に雇用されていて、皇后定子の無給の私的秘書官兼教育係でしたので、特に早朝出仕の必要はなかつ

たのかも知れません。紫式部も中宮彰子に仕える同様な立場でした。(一帝二后制度の制定)

宮中に出仕する女房達(房・部屋を頂き宮中や貴族に仕える女性)は従五位上または下で上臈、中臈、下臈の身分に分かれていて、仕事の分担があり、皇后、中宮、女御の寝所の片付け、御簾の巻き上げ、着付け、髪の手入れなど、時間通りに進めなければなりません。

その他にも食事を運ぶ身分の低い水仕女やオマルにとつた下の物を始末する人など、宮中は朝から何千人もの人が働き、1日延べ1万人が働く所でした。

平安の貴族の美意識

平安貴族の女性は名前ばかりか顔も親以外の他人には見せる事はありませんでした。

恋の駆け引きも装束を見た男性と和歌をやりとりして相手の教養などを推しはかるもので、自らと一族の将来が掛かった真剣なものでした。

その一つが十二単(正式名称：五衣唐衣裳、唐衣裳姿)で表現される「襲の色目」です。

襲の色目の中心は単の上に着る五衣で、五色5枚の着丈袖丈を少しずつ短くして、色の重なりが季節に合った

「をかし」「あはれ」を表現しようとする物でした。

寢殿造りの建物には戸障子がありません。絹の草木染は日の光と灯火では色目が違って見える物があり、これらの表現にも苦心したようです。

さらに装束全体のツヤを出す為に綾織りの生絹（未精練の麻の様にゴワゴワした絹織物）を砧打して艶出した打衣を五衣の上に着て色目のツヤを強調したり、生絹に糊を付けて乾かし、ハマグリの様な貝の背で滑らかにして艶を出したり、漆塗りの板に張ってより強いツヤを表現した様です。

二つ目の「重ねの色目」とは下に着る単以外の4種8枚を表は地紋綾織、裏は平織地で仕立て、さらに表裏の染め色をわずかに違えて、重ね着をしてツヤの奥深さを表そうとしたものです。

三つ目の「織重ねの色目」とは縦糸と緯糸の色を僅かに違えて色のツヤと幅を表現しようとした。十二単は玉虫の羽根のような鮮やかな構造色を期待したものでした。

しかし十二単はあくまで正式な儀式用装束で、神社参詣などは唐衣や表着を省略した小柱姿の準正装でよいとされ、日常ではもっと色々簡素な着方があった様です。

平安時代の絹は誰がどこで作っていたか

古代の朝廷は権威を示す上でも中国貴族の様に美しい絹を纏うことが必要と考え、4世紀初期に高句麗から秦氏を招聘し生糸の薄織物の技術を日本にもたらしめた。それは紬糸を作るのとは違った高度な技術で、当時の平民の住居の多くが堅穴式住居でしたので、養蚕、機織りには不向きで、さらに平均寿命が30才前後で生産は捗どらず、貴族の需要に十分ではありませんでした。

そこで朝廷は高麗や百済から服部氏や呉服部氏を招聘し、天皇や貴族の衣を専門に織らせる部を作りました。呉服部氏の子孫が作る服が日本の呉服の原型となる平安時代を迎えるのです。

絹着用の効用

絹は貴族の健康にも一役かっていたと思われれます。絹は重ねても意外に軽く裾捌きもよく、夏涼しく冬暖かく、絹由来の抗菌性が入浴の習慣の無い貴族達の肌の清潔を保ち、消臭効果も發揮していたようです。

彰子中宮は87才、藤原道長62才、清少納言、紫式部は58才と当時としては大変長命でした。

「江上浩二の独り言」 70 江上浩二

自分だけの歴史

異なった色の積み木を重ねるように自分だけのフェイクではないが、面白くもない本当の歴史を作ってみたいとお考えになったことがあるだろうか？フェイクとは偽りのという意味をいい、そうではないので事実・本当の事だ。もう少しこだわりがあるのだが、異なった色の積み木と始めに申し上げたが、絵の具が何かで木に色を浸み込ませたのではなくて、箱根の寄木細工のように、種々の木々を切つてよく見ると、木は肌だけでなく中身も特徴のある色合いを持つっており、それで異なった色の組み合わせが可能となつて、素晴らしい箱根寄木細工となるのだそうだ。実は私自身も畳一枚くらしいの大きな無垢の木一枚で机を作りたかったのであるが、木工の工房のデザイナーに裏ワザを教わつたことがあり、見せかけの大きな一枚の木を例えば小さなぬ枚で構成して造る時、木目・木肌・木地の似たものを用意して、上手く木目を合わせながら接着剤で割り合わせて、本物と間違ひそうなく張り合わせの「無垢の大きな木」を造つて少しでもお安くするそうだ。そんな裏話を18年位前に聞き、それは良くないと

思い、逆に7-8種類の色合いを持つ原木を探してもらい、それらを目立つように張り合わせて大きな一枚にして頂いて、それを今でも自分の机として使っている。

歴史の構築と言えば、よくあることだが小説家が史実を綿密に調査して、小説としての歴史を、史実として後年になつて発表し多くの人に知らしめし、関心をもたらすことが多い。江戸幕末から明治への変換期に多く、坂本龍馬が一番の例であろう。深くは立ち入らない。

以前、意外な自分自身の経験と題して2年前に、今年ちょうど百年になる関東大震災の実体験談として、私の実父と同じ歳の方の話が紹介されていた。ちょっとおかし、実父は当時2歳で震災を体験したらしいが記憶がないと生前、話は聞いたことが無かつた。よく調べると私の実父と同じ歳の方は年齢が少し上のお兄さんから後年聞いた話をもとにして実体験談として語つたそうで、これらは学習した横浜での関東大震災で、後で学んだことが加わつて自分の体験として身についたもので、よく考えるとそれは今流のバーチャルで加飾された体験である。よくある事らしいが、親、年上の兄妹から伝え聞いた話で、公知の一般史実は意外と知られていないのかも知れない。

最近、自分の心・魂をハツとさせた事があつた。それは今年の令和五年に入つてからで、世間ではTV放送開始七周年記念とかさわいでいるが、私も七十歳になつて、小津安二

郎監督が東京物語を執筆するために、定宿としていた茅ヶ崎館に滞在していたと知ったことである。さらに、小津安二郎のカメラマン〈厚田雄春氏〉に関して本アララギに寄稿し、素朴な50ミリのレンズと静寂・白黒の世界観に心を打たれ高揚している時に、小津監督が茅ヶ崎館に滞在し、東京物語を執筆した時期が私の生まれた昭和二十八年と知り、さらに執筆日記が残されていて、私が生まれた四月二十一日が自分にとっての歴史的出来事であることを知ったことが契機となった。

表 勝手に積み重ねる自分の歴史

小津監督、東京物語構想 二月、執筆開始 四月八日

昭和二十八年四月二十一日に、私は生を受ける。

小津監督、東京物語執筆脱稿 五月二十八日

7才の時に横浜・鶴見区生麦の花月園近くから移り住んだ茅ヶ崎 昭和三十五年秋

小津監督、短い人生を閉じる。昭和三十八年

地元の高校へ入学し、友人となった大船出身のW君の

父親が大船の松竹撮影所の仕事をされていた。昭和

四十四年春

当時は小津監督も知らず、W君に何も聞けなかった。

たったこれだけの私の歩みは先ず、東京物語の執筆期間は

構想を含め昭和二十八年二月から五月末、当時の日記には四月二十と二十二日の記載はあるようだが間の二十一日は抜けているようだ。それが気になり、小津監督の東京物語執筆前後の日記を追ってみた。

翌二十二日髭剃り、鼻の下長くなる、大阪の宿をやる（と書かれており、非常に日常的である）。詳しくは茅ヶ崎館で同宿し東京物語の仕事をしていた脚本家の野田氏の日記では、二十日・車券を買って少し当たる。気候は温かし海岸を散歩する、二十一日・車券を買うが当たらず、暇をしていて、気候も温和とあり、競輪の車券買いを度々依頼したとあり、近在の伊東・小田原・平塚、東へ向かうと花月園、川崎競輪場と懐かしい場所があり、それらは文豪の坂口安吾も競輪が好きで戦後の似た時代に娯楽として楽しんでいたようだ。私はその花月園競輪場の西側の関東ローム層の崖ぶちの下にあった父の勤めていた会社の社宅で気候も温かく平穏な下で生まれたようだ。皆さんの小さい頃の体験・経験を振り返ってみては如何ですか。

参照資料

野田高梧氏日記、小津安二郎氏日記・昭和28年4月分



初狩便り
(23)



花野みぷり



出来秋

空は高く、空気は澄み、暑くも寒くもない陽気となり、無事に稲刈りの日を迎えることができた。今年はず統計開始依頼の記録破りの夏の暑さで、稲の実は早く、例年より十日ほど早い稲刈りとなった。なかでも餅米の熟成は早く、八月下旬には、収穫できるほどの稲穂となった。雀はこの適期をちゃんとわかっている、コシヒカリの田んぼには目もくれず、餅米の田んぼで豊作を祝って欣喜雀躍。おそらく半分ぐらいいは雀の腹に収まってしまった。「ええ、半分も喰われてしまったの」という声に、リーダの内山さんは「まあ、生物多様性保全のためだから」とのどかな返事。

稲刈りの一番難しいところは天気判断。天気図、天気予報を睨らみ、観天望気も含めて、収穫の適期をはずさないよう判断する。それぞれ都会で仕事をしている仲間が日曜日に集まった。稲を刈り進み、束ねて、稲架いねかにかけていく。稲の良い香りは、うれしさに拍車しやがかかる。天候にもよるが十日ほど天日干しをしてから脱穀する。天日干しの新米のおいしさと言ったら：日本人に生まれて良かった。今年も「出来秋」となったことを、お天道様を始め、四方八方に感謝する。

(写真：菅野昌英)

本田カイロプラクティック先生の春夏秋冬

本田のひとり言

<https://hondachiro.exblog.jp/>

2023年9月4日

秋花粉

今日は久々のしっかりとした雨です

朝は少しですが涼しく感じます

植物達にとっても恵みの雨になりそうです

今の時期

くしゃみ

喉のシユシユフからのむせる咳

鼻詰まり

目の問題

などなど

そんな症状が出やすくなっています

(例のウイルスも流行っていて難しい所ですが)

秋花粉が飛び始めています

今年から1年中

花粉を感じる方が増えている気がします

例のウイルス明けて環境が戻り

夏の暑さの長引きなどで

心身ともに疲れが出ているからかもしれません

3S+ゆたぼん+ヨー

グルト+八分 で

腸を内臓を元気にして

アレルギーやウイルス

に備えていきましよう

今日も笑いながら行きましよう



2023年9月8日

台風に十分気をつけて下さい

朝から激しい雨が降っています

今日 本田カイロプラクティックにいらっしゃる

予定の患者さんは 来れないようでしたら遠慮なく
御電話下さい

いらっしゃる際は

電車の中や駅で身動きが取れなくなるように

くれぐれも無理せず 御自身の安全を確認の上

十分に気をつけていらしてください

今の時期

食当たり

胃腸炎

などの下痢や嘔吐 微熱

などの症状が出やすくなっています

食べ物に関しては

生物はなるべく避け

食材の温度管理を気をつけましょう

まな板 包丁なども細目に殺菌しましょう

これらの菌は

洗い流すという事が大切です

手洗いをしっかりとし

時間をかけて流水で洗いながしましょう

3S+ゆたぼん+ヨー

グルト十八分

も引き続きやっていき

ましょう

今日も笑いながら行き



「東洋医学の甘味の栄養」

東洋医学にや五味ごみがあり
五味とは食べ物・栄養素
五つの味が精を成し
肉体細胞 作られる
精には先天 後天の
二つの精が 存在す
先天 腎精 陰となり
親から受けぐ 遺伝子を
発現 細胞 作り出す
後天 脾胃の栄養が
先天の精を 補充して
細胞・気力を生み出すぞ
五味の中心 甘味の食材
甘味は 脾胃を養う味覚
後天 養う 栄養素えいようそ
甘味の中でも 穀物は

ご飯や麺など主食となる
でん粉・糖質 多ければ
消化に負担がかかりつつ
脂肪や乳酸じゆさん増えすぎて
身体 重くて 怠くなる
運動する時しじぎ 糖質は
力の元となるけれど
動かぬ糖質 太る元
老化も病気も始まるぞ

甘味の食材 魚・卵・肉
タンパク質が増えるなら
必須の栄養 満たされて
細胞再生・代謝は上がり
若さと元気を取り戻す
タンパク質が足りなけりゃ
三食食さんしょくべても 栄養失調
元気もなくなり 老化する
元気と若さを維持するならば
精を養う甘味の栄養
タンパク質を摂取せよ



「秋の養生・お風呂にて」

秋はお風呂に良い季節

夏の疲れを取り除き

冬に備える季節なり

夏の暑さは汗を生み

汗は陽気を消耗す

皮毛の陽気は 汗腺の

開閉調節する働き

猛暑が続けば 汗出いでて

皮毛の陽気は消耗し

水分抜けて 乾いてく

潤い・陽気が無くなれば

寒さや冷えに弱くなり

胃腸や免疫 低下する

夏の避暑には冷房が

大きな役目を果たすなり

冷房無ければ 暑すぎて

熱中症へと向かってく

然るに 夏には必須の

冷房 冷えの大元で

通年 一番冷えるのは

実は夏の季節なり

そこで夏には遠ざけた

お風呂が大きな役を得る

夏で募った 皮膚の冷え

乾きや疲れを 癒すには

適度な温度のお風呂にて

温もり・潤い 満たせれば

夏の疲れが抜けていく

ぬるめのお湯にゆっくりと

つかれば神経落ち着いて

胃腸も復活動き出し

免疫力も復活す

お風呂の恩恵 回復で

食欲もどれば 元気なり

秋冬楽しく過ごせるぞ



閑しずかに秋しゅう蟬せんを聴きく

殿山木風

庭樹ていじゆ秋あきに移うつるは客きやくを送むかへて明あきらかなり

蛸ちようり蠨ようい何ずれの処ところか蝸ひぐらしの聲こゑを聴きく

空くう台だい意いに適かなう好こう風景ふうけい

緑みどり爽さわやかに天てん高たかく人ひとも亦また清きよし

閑聽秋蟬

庭樹移秋送客明 蛸蠨何處聽蝸聲

空臺適意好風景 緑爽天高人亦清

(語釈) ○近…迎える。○客…ここでは桜木に鳴く色々な種類の蟬のこと。○蛸螻…ミンミンゼミやクマゼミ。○蝸…①蟬の総称。ひぐらしと特定するのは国語なりとの辞書もあり。②ひぐらし。○空台…ここでは誰もいないテラス。
(通釈) ここでは誰もいないテラス。

(通釈) 庭の木々が秋を迎えたなと解るのは、迎えるお客さんで明らかになる。克つてのお客さんであったミンミンゼミやクマゼミは何処へ行ったのやら、今はひぐらしが鳴いているのである。

私はテラスのこの時節の好風景が気に入っている。

緑は爽やかに天高くして人もまた清らかにして呉れるのである。

※これも兼題である。夏の終わりになるといつせいにツクツクホウシが鳴き出す。秋蟬は別に蝸をささないが、たまにああ珍しく蝸が鳴いているなど思った事がある。そして印象的な想い出に移って行く。

九州迄の歩き旅の時、広島に入る前は本郷、そして西条と云う所を通った。内陸部に道は入っている。木立が茂る山道に差しかかると人通りも無く、やがてカナカナカナカナと薄暗い森陰から聞こえてきた。ああ、これが蝸か、しかし随分多くの鳴き声だな、そしていやに寂しさを感じさせるもんだなあ印象に強く残ったものだった。今は亡き青山さんと歩いた。何時までも良き想い出である。

カナカナと 仄かに聴くや一人きり

編集室だより【二〇二三年八月】

今泉 由利

物心つくと、短歌の方々が、父と母との「三河アララギ会」に集う、歌会であり、編集会であり……。三河アララギ会を支えて下さった方々、私の決して忘れない大切なです。

岡本八千代先生が逝去されました。極限の寂しさです。「三河アララギ誌」を守らせていただきます。
今泉由利

由利さん

「地球にてII」おめでとぅいふじます。

堂宇にとれば桜の花の美し、デザイン、表側と裏側とのコントラストの妙、繕けばまた確かな裸婦のデザインに新鮮な歌集を感じております。

お歌はやはり題名にふさわしくダイナミックでどこか常に生き生きと

した躍動感にみながうたっていると
思っています

そしてその中に由利さんでなければ
表現できない抒情がこめられて
いると思います。以下まじまじ
かかせていただきます

満月は昨夜の丸さそのままに月の明りの
ポストンを去る

櫓田は枯れて広がる閑東平野枯れ色の
向ふに陽の沈みゆく

細雪をきしませ歩む兼六園わが足跡に
次々の雪

飾りなきたゞ黒色の絹を着て華やかに
よりその光沢に

自らの心のままに自らの身体のままに
今日を過ごしぬ

知る顔にゆき、あひながら故里の葱は
坊主となりたる小道

日蓮は徒歩にて身延の山頂へ私はロープ
 ウエイにのりてゆきたり
 しばらくは見上げてをりし石段を登りて
 出あふ木花咲耶姫命
 何もかもいやになりたる心地してヒメヂョウ
 ンの細き花びら
 飛行機の窓にやさしき丸み見ゆ丸み
 地球のほのかな丸み

少しばかり宇宙の中にのりいだして星ばかり
 なり飛行機の窓
 秋となる雨降りてをり窓ぬれてワイシレッドの
 傘でこしゆかむ
 地球の四方キロの旅を終へて訪ねむとするは
 二病床六尺
 目覚むれば声掛けあふといふほどのこと
 てへ新し由野とおろ日々

現状のままだに今日も過ぎゆくを空上しきとも
 安きことも
 雨傘はたちまち日傘となりしゆえ水分神社
 にてふさぐたたま
 東寺なる五重塔の影の上に私の影を
 垂ねてしばし
 引越しを終へて我家の大き窓縹雲あり
 高く高く

まだいはば書ききぬきたいのですけれど限ッ
 かみりせんのでこの歌でパソコンとめまうつ。
 「若者略歴」あとかきしも洗練された早稲花
 ですばらしいと思いまうした。
 この魅力的な歌集を下さいますこと
 心よりお礼申しあげまうす。
 かしこ
 岡本ハル代
 十月三十一日
 今泉由利様

「三河アララギ」について

- ◇三河アララギ発行所 〒一五〇・〇〇一三
東京都渋谷区恵比寿三・四五・三
フォーレストヒルズ三〇二
ケイタイ 090・8434・8646
TEL 03・6765・5838
- ◇URL <http://imaizumiyuri.jp/>
E-mail imayurizm@gmail.com
- ◇三河アララギ誌は毎月発行します。
- ◇どなたも参加、投稿いただけます。
三河アララギ編集室 今泉由利 までご相談ください。
- ◇原稿は毎月末日までに、発行所まで郵送、メール、お届け下さい。
- ◇会費制は廃止。
- ◇昭和七年、三河地域のアララギ歌人が集い、創立歌会が開かれ、御津磯夫主宰「三河アララギ」誕生。
- ◇令和四年現在まで一号の欠刊なく、続いてきました、続いてゆきます。
- ◇編集・発行 今泉由利